

(連載「ワイワイガヤガヤ経営品質」)

三重県経営品質協議会運営委員長 長友隆司 (Kairos 社長)

「ほまれ」の復活を願う

この連載を始めてからずっと気になっていたことがあります。それは「餅屋」の話です。彼らが経営品質に取り組んでいるわけでもなし「知らぬ顔の半兵衛を決め込むか」と思いつつ「さりとして触れずに済むはずもなし」と筆を迷わせてきました。ある日ある時、旅の帰路、近鉄名古屋駅に「餅屋」の屋台が立っていました。即座に「買う」と決めました。

受け取る「包み」いつもどおりと思いきや、かつては誇らしげに書かれていた「ほまれの」の文字が消えています。販売員氏にそのことを告げると、なんとも言えぬ面持ち。悔しい気持ちが「ジーン」と伝わります。「現場の人間のこの辛さ、なんとかせなアカン」覚悟を決めました。「餅屋」の話をししましょう。

実は「餅屋」さんとは経営品質のさる場面で出会ったことがあります。その時のお話、ノートにメモとして今でも残っています。たいそう立派なお話で「さすがやなあ」と思ったのを覚えています。またある時「経営品質向上活動の推進を」とお願いに上がったことがあります。出てきたのは「トーキョーのナントカ」にいたとおっしゃるご担当者。ほとんど門前払いに近いご対応でした。その落差の大きいこと。

実は今回の騒動が「餅屋の事件」としては初めてではありません。皆さんもうお忘れかもしれませんが、大手就職情報誌関連企業が起こした株のインサイダー取引事件、元官房長官が絡んだ事件として世間様をお騒がせしました。その元官房長官氏の家業も「餅屋」。ほとんど軒を連ねて並んでいます。なぜこうも「餅屋」が騒動を引き起こすのか...

共通する根があるのかどうか、一般ピープルにはさっぱりわかりませんが、経営品質でよく使われる「組織敗北の3C」のたとえによく当てはまるのではと思います。「組織敗北の3C」とは、「自己満足」「保守主義」「思い上がり」を英語で表すと全て頭文字が「C」で始まるのだとか。

礼儀を弁えぬ不遜な言い方ですが、所詮は「餅屋」。財を積み上げ、身は権力の頂点を極めようとも、お伊勢参りの善男善女をもてなす一皿の餅と暖かい茶に己の全てがあつたはず。伊勢の俳人孝堂の句に「控えめに生きる幸せ根深汁」ともある。目立たずとも職を以って世の一隅を照らす喜びこそ「赤心」ではないか。どこかに「驕り」はなかったか。

こう書かざるを得ない三重県人の悔しさ、情けなさ。伊勢商人たる末裔の臍噛む気持ちは「餅屋」一人のものではない。「ほまれの」の文字は我らが誇りでもある。世間様に俯く気持ちは三重の企業人なら皆、変わらない。だから「餅」を買う。再起に期待する。

経営品質では、経営の要諦をダーウィンの進化論でも説く。「強い者、賢い者が生き残るのではない。変化できる者だけが生き残るのだ」強くあらずとも、賢くなくとも、餅を愛する庶民の心は変わらない。五十鈴川の流れのように、時代に沿って、民に沿って、変わり続けること、手弱女ぶりこそ我らが流儀。故に伊勢の餅は柔らかい。そこに「慶福」があるからだ。経営品質の精神もまた変わらない。

一日も早い「ほまれの」の文字の復活を切に願う。